

妹が詠む兄への敬愛

文人の
武蔵野

わが心静かなるかなた
だひとり閑伽たてまつ
りみ臺と語る

昭和戦前期、初冬のある晴れた日に、森鷗外の妹が三鷹の禅林寺を訪れて詠んだ歌です。鷗外を「お兄様」と呼び敬愛していた妹小金井喜美子（1870～1956年）もまた文人でした。翻訳を発表し、随筆を書き、歌を作りました。喜美子には、静かなる武蔵

森鷗外 ③



三鷹市の禅林寺に移された森鷗外の墓

野を訪ねて久しぶりに森家のお墓におまいりし兄や父を追慕する「墓参」という作品があります。この歌は、その挿尾を飾っています。永井荷風が禅林寺を初めて訪れたのは1943年でしたが、この時の喜美子の墓参は、それより少し前のことだったと推測

されます。

「墓参」には「大火にあい、お寺が江戸からこの連雀村へ引移った頃の武蔵野の景色は、どんなでしろうと思われまふ。震災後森家のお墓を向島からここへ改葬した時にはひどく荒れていました。今は本堂、鐘楼、庫裏までさっぱりと改築出来ました。」と記されています。「新開」で「薄の穂が原いっぱい」のところに「栗の落葉」が散る風景も描写されています。三鷹駅の設置に尽力するなど境内だけではなく一帯に心を配ってきた禅林寺に寄りそふような筆致です。

喜美子が語り合った「み臺」には、「中村不折氏」の筆跡で「森林太郎墓」と刻まれています。中村不折は日本を代

表する洋画家・書家で、子規や漱石、鷗外らと親しく交わりました。不折は鷗外の遺言に基づき、揮毫しています。その見事な墓碑銘の前では、思わず襟を正さずにはいられない人も少なくないのではないのでしょうか。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

おすすめの1冊

「森鷗外の系族」

荷風が美しいと評し、現代人には書けないと言われる美しい雅文に触れることのできる一冊です。「墓参」の他に、鷗外の臨終の場面を追憶した「兄君の最後」、医師で劇評家の篤次郎（鷗外の弟）の生涯を紹介した「次ぎの兄」なども収録しています。



（小金井喜美子著・岩波書店提供）